

脳卒中 仕組みと予防学ぶ

熊本市で公開講座



市民公開講座で熊本大病院の医師から脳卒中が起きる仕組みを聞く参加者＝8日、熊本市中央区

脳卒中の仕組みや予防をテーマにした公開講座が8日、熊本市中央区の熊本城ホールであり、市民や医療関係者ら約200人が、脳梗塞やくも膜下出血を未然に防ぐための生活習慣の見直しや手術方法について学んだ。日本神経治療学会学術集会と日本脳卒中協会熊本県支部の共催。

脳卒中は「脳梗塞」「脳出血」「くも膜下出血」の総称。県支部副支部長で熊本大病院脳神経内科の中島誠医師は、糖尿病などで脳の動脈硬化が起こる脳梗塞と、高血圧などで脳内部の血管が破裂する脳出血の違いなどを紹介した。発症から時間の経過とともに後遺症が重くなり、寝たきりの原因の約3割が脳卒中といわれている。

中島医師は「激しい頭痛や言葉のま

ひなど普段と違う症状が出たらすぐに病院に行ってほしい。数分で症状が治まっても油断しないで」と呼びかけた。

国立病院機構熊本医療センター脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の上田緋沙美さんは、脳卒中で搬送された患者の事例を報告。脳卒中は突然発症するため、家族が混乱したり、本人が意識不明のまま治療方法を決めたりする場合がある。「もしもの時のために、家族と延命や治療方針などを話し合う『人生会議』をしておくことが大切」と伝えた。

夫婦で参加した御船町の毛利武憲さん(73)は、「親をくも膜下出血で亡くし、自分も高血圧で治療しているので、改めて家族と健康について話をしようと思った」と話した。(関本百合恵)